菜切谷（なぎりや）廃寺跡

大崎市教育委員会　髙橋誠明

所 在 地　宮城県加美郡加美町菜切谷地内
立地環境　大崎平野西部、鳴瀬川左岸の標高 40 m の丘陵端部
発見遺構　建物基壇
年　　代　７世紀末～ 10 世紀

遺跡の概要

菜切谷廃寺跡は大崎平野の西部、国道 457 号の東側に位置し、鳴瀬川左岸に分布する北西から南東方向へと緩やかに傾斜する丘陵の突端付近に立地する。西側１㎞には古代の城柵官衙跡である城生柵跡がある（第１図）。

第１図　菜切谷廃寺跡、城生柵跡の位置

菜切谷廃寺跡では、真北方向を基準に造営される建物基壇が発見されている（第２図）。基壇は乱石積基壇で、規模は東西 12.7 m、南北 10.8 m、現存する高さは最大で 1.4 mである。基壇上面では礎石も確認されているが原位置をとどめていない。基壇とその周辺から瓦が多量に出土していることから、基壇上の建物は瓦葺であったことがわかる。なお、この基壇以外の建物の存在は不明である。

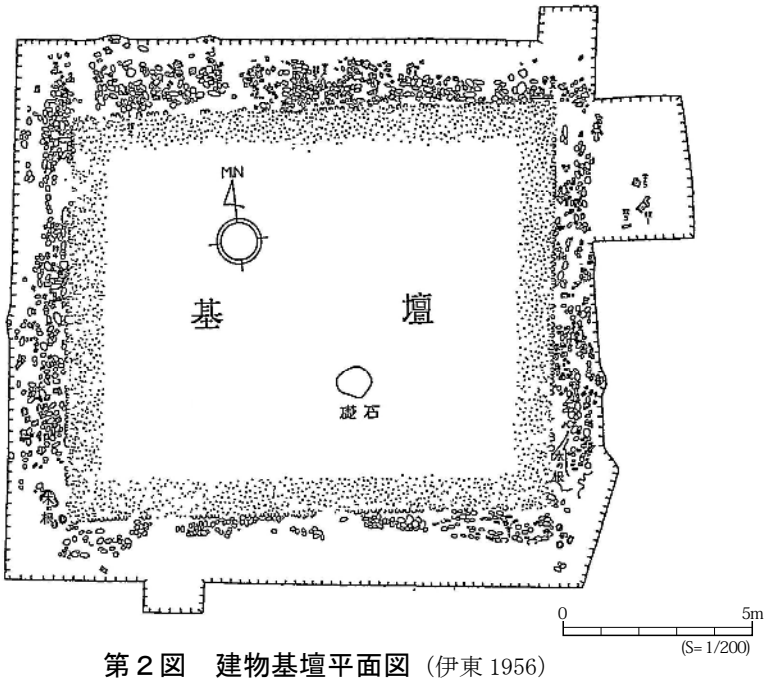
出土遺物は発掘資料のほか内藤政恒による収集資料などがあり、瓦、土師器、須恵器がある。軒丸瓦には雷文縁複弁四葉蓮華文（第３図１）、四弁花文（第３図２）、八弁花文（第３図３）、重弁八葉蓮華文（第３図４）、鋸歯文縁細弁蓮華文、珠文縁素弁蓮華文（第３図５）、円文（第３図６）、丸十字文、素弁八葉蓮華文（第３図７）、変形複弁花文（第３図８）、樹枝文（第３図９）、軒平瓦にはロクロ挽き三重弧文（第３図 10）、手描き二重弧文、均整唐草文、植物文、交叉唐草文がある。

発掘調査の結果より基壇上の建物は寺院の金堂と推定され、この他に堂塔の存在を示す基壇が見つからないことから寺院は仏堂が若干あった程度の小規模なものと考えられている（伊東 1956）。寺院の性格については、神亀５年（728）に置かれた玉造軍団もしくは玉造柵に推定する城生柵跡の付属寺院として創建されたとする説（伊東 1956）、７世紀末頃に地方豪族が造営する寺院として創建され、その後、郡衙や城柵の付属寺院として改組されたとする説（桑原 1990）、和銅６年（713）前後に建立され、多賀城創建時に改修された郡衙（賀美郡）付属寺院とする説（進藤 1990・2010）、５期の変遷を考えⅠ期を８世紀第１四半期の初頭、Ⅱ期を多賀城創建期とし、Ⅱ期を城生柵跡と対になる寺院とする説がある（渡邊 2009）。

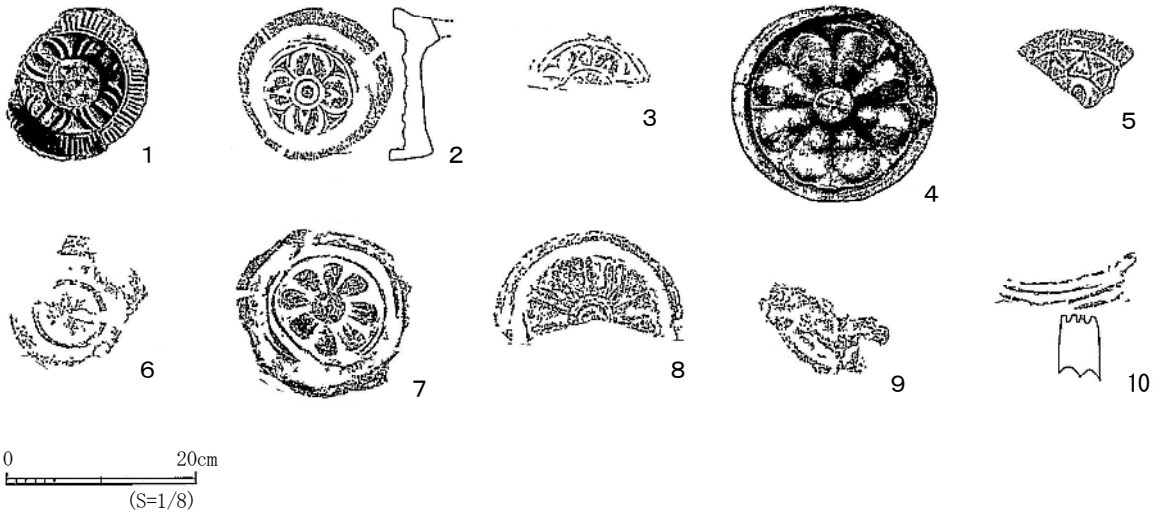
関連文献

生田和宏 2019「菜切谷廃寺（寺院）」『第 45 回古代城柵官衙遺跡検討会』資料集
石田茂作監修・原田良雄編 1974『東北古瓦図録　内藤政恒先生蒐集』雄山閣出版
伊東信雄 1956『菜切谷廃寺跡』宮城県文化財調査報告書第２集
桑原滋郎 1990「宮城県内の古代寺院跡について」『中新田町史研究』第２号

佐川正敏 2008「東北地方の寺院造営－多賀城創建期以前の寺院－」『天武・持統朝の寺院造営１－東日本－』帝塚山大学考古学研究所
進藤秋輝 1990「多賀城創建以前の律令支配の様相」『考古学古代史論攷』伊東信雄先生追悼論文集刊行会
進藤秋輝編 2010『東北の古代遺跡　城柵・官衙と寺院』高志書院
内藤政恒瓦資料研究会 2013「宮城県を中心とする内藤政恒瓦資料（２）」『宮城考古学』第 15 号
村田晃一・吉田桂 2003「城生柵跡の概要〈関連資料〉菜切谷廃寺跡」『第29回古代城柵官衙遺跡検討会』資料集
渡邊泰伸 2005「宮城県加美郡色麻町　土器坂瓦窯跡の調査」『仙台育英学園高等学校研究紀要』第 20 号
渡邊泰伸 2006「古代東北における古瓦の研究」『仙台育英学園高等学校研究紀要』第 21 号
渡邊泰伸 2009「陸奥国における雷文縁複弁四葉蓮華文軒丸瓦」『古代瓦研究Ⅳ』奈良文化財研究所



第２図　建物基壇平面図（伊東 1956）



第３図　出土軒瓦（内藤瓦資料研究会 2013 から作成）